ラーのロビーでは、夕飯後のひと時カ ントンヴァリスの地図を展げてわれわ の夢はモンテローザに通っていた。 一年以来常宿にしていたホテルアド

ヴ ア IJ ス 0 登 山

生 武 治

間ウェンゲンで行われたスイス選手権 旬から山村グリンデルワルドでスキー 間の鉄道は休業となる。槇さんが一九 から分岐するヴィスプとツェルマット なれば交通はとだえる。ローヌの本谷 内グラーフエンから誘いの手紙をもら 大会で知りあったツェルマットの山案 周辺を滑りまくった松方と私は、その ュワルツホルンなどグリンデルワルド ツヒエンをはじめファウルホルン、シ イデックからラウベルホルン、メンリ を堪能すること四週間。クライネシヤ た。そのころのツェルマットは冬に ウィンタースポーツの最盛季一月中 ビェツと乗換えてリョッチベルグルー わりたいというので出発がのびのびに郎、鹿子木員信の両先生もこの行に加 でニコライタールが分岐するスタルデ 前夜から頼んであった二頭立ての馬車 ての翌朝はまだ暗いうちに宿を出て、 であった。駅前の旅籠に一夜をすごし 降りたのは谿底の村に灯の入ったころ た乗換えて、ひと駅河下のヴィスプに トでローヌ溪谷に出た。ブリーグでま とになった。 を過ぎ松方、松本、麻生が先発するこ ミニュスをひいきにして のだが、われわれはツェルマット目ざ ンまで四キロ余を古風な乗物にたよっ 々にたって、インテルラーケン、シュ そうこうしているうらに二月も中ば そとからザースの谿は左へ分れる グリンデルワルドを昼早 いた渡辺八

みさんに頼んで犢の焼肉といもで腹ご 途中ニコラウスの部落で農家のおか

V

の村は静まりかえっていた。 とだえがちな半世紀前のツェルマット は、日がとっぷり暮れてからで交通の してくれる山案内の家におちついたの ンに導かれて、滞在中われわれの宿を め知らせてあったから、ツェルマット さらされている個所がある。あらかじ た。ランダヤテッシュの村をすぎてツ しらえをした以外は歩きずめである。 部屋も食事も簡素なものであっ 対端まで出迎えてくれたグラーフェ ルマットに入る手前に雪崩の危険に を履

> な空模様。 やんではいたが、

なかった。翌日からはゴルナーグラー だ。彼はわれわれと同年輩でソルボン ドに行く途中のリフェルゼーだとか、 が、グラーフェンの妻君の料理は純粋 ヌ大学で哲学を修めたインテリ山男で イドにはベルナルド・ビーネルを頼ん マッターホルンの山腹、シュワルツゼ クリームを山盛にしたメラングを忘れ めには毎晩の食後のデザートは泡立ち なスイスの山家風で、甘党の松方のた 企業家によってつまらぬものが出来 あたりへ足馴しにでかけた。サブガ 斜面も、 風を避けていたが、稜線に出たらゴル面ではあったが、南側だからある程度 クアイゼンにはき代えた。かなり急斜 の登頂という地点でスキーをシュタイ 上部である。いよいよブライトホ ド競技)の行われるプラトーローザの シアータキロメットリ(直滑降スピー ビニアのスキー倶楽部が毎夏催すラン た。その左斜面を登るとオーバーブラ には大きなシュルンドが口をあけてい 歩き出した。はじめは極くなだらかな 運搬につれてきたポーターを小屋に残 ナー氷河から吹上げてくる風は吹雪を ットエ。そこは近年イタリアのチェル してともかくテオデュルパス目指して ・世尾根にステップを切ってく われわれ五人とガイド三人は、食糧 峠の直下から急になってそこ

われを起してくれた。睡気ざましにブ

カン

の山案内は階下に寝て翌朝四時にわれ 外ない。グラーフェンとビーネル二人 すませれば二階の寝室にひきとるより 天をついて独特の山容である。夕餉を

ルン

五時間の登高で肩についた。 五時の出発で途中ほとんど休止なしで

四

五.

とビーネルの組にアンザイレンした。 の前で履いてグラーフェンと松方、私ら、アザラン皮を張ったスキーを小屋 ラックコーヒーでバンをかじって



昭和49年(1974年) (No. 348)号 本山岳会 $(\mathbf{J.\,A.\,C.})$

定価一部 100円

次

松方三郎君とのヴァリスの登山 松方三郎君とのヴァリスの登山 麻生武治・ 2 海外通信 成城大学ジャヌー遠征隊 ………橋村一豊… 4

図書紹介

テイロット谷(東京電機大第二部 山岳部ヒマラヤ遠征報告1972) ……高遠 宏… 5 マナスル西壁……望月達夫… 5

は、お昼過ぎだった。 入口にあるガンデック小屋に着いたの ってイタリアへ越えるテオデュル峠の デュル氷河に降り、緩かな斜面を横切 が右にみえてくるあたりで左側のテオ シュワルツゼーのシャッペル(小聖堂) いて、落葉松の間をぬって、電光型に ンのヘルンリ・グラートの裾にとっつ イトホルンをめざして、マッターホル 今度の山行の手はじめにと選んだブラ 快晴の日が二、三日続いていたのに、 た。鹿子木、渡辺両先生が来られて五 トの冬こそこの世ながらの天国であっ 人勢揃いが出来たところで、それまで

> の若き日の山歩きの記録にすぎない、 辞にも愉快とは申せぬただ山好きの男 にピッケルを振ってくれているのを見

ルナルド・ビーネル君は手袋もつけず

お世

ネーゼかなんか遅がけの昼食をとって ころのスイス山岳会の山小屋にくらべツェルマットの村営の小屋で、その なるのは明日の天気だ。われわれが小 ると大分粗末だったが、それより気に いた。さて明けの朝には雪はいちおう いる小屋の外はチラチラ小雪が舞って 屋に着いて案内の作ったマカロニミラ いまにも泣出しそう のツーアに必要な糧食をととのえて次欲がいよいよつのって一日を休養と次欲がいよいなってからの松方と私は登高 かったから、われわれは素裸でトカゲがある。その小屋についてまだ陽は高 は無論運休していたから鉄路にそってどり着いたら大汗になった。登山鉄道 のとは全く別の姿で頂上が痩身に鋭く は、ツェルマットやブルイルから見る ザヒユッテとまたの名カヴァヌベタン 陰の小高くなったところにモンテロー とゴルナー氷河の出合いのモレーンの ひたすら登った。グレンツグレッチー トの一駅手前のリーフェルホルンにた の日モンテローザに向った。 して、他の三人は下山の翌日ツェルマはつまびらかでないが、松方と私を残吹雪の中の登頂でへこたれたかどうか を愉んだ。ここからのマッターホルン ットを後に谿を出てしまった。 一点の雲もなくゴルナーグラー 他の三人は下山の翌日ツェ その日

は

○m余りだからけっしておそくは 一mのグレシッザッテルである。 の岩登り。脚だけではない両腕を使。スキーデポからはアイゼンをつけい。スキーデポからはアイゼンをつけい屋からここまでの標高差一、六○ 小屋からことまでの標高差一、

ンブランまでの展望をほしいままにし ーチホルンまで見はるかす大パノラ たが、スイス側は一面の青空、北はビ リア側ロンバルディアは積雲の下だっ になく実に恵まれたお山だった。イタ 尾根の登りをたのしんで、ドウーフー ある。天気は上々だったから慎重に岩 とになる。苦しいよりは愉しい経験で のすみまで冷えきった大気を吸込むこ マ、西の空にはグランコンバンからモ ったのは十一時で、太陽は輝き微風だ ルシュピッツエ四、六三八mの頂に立

少の疲れもあってわれわれの脚は重か たときはさすがに日は暮れていた。多 ラウスと村々を過ぎ、スタルデンに来 だっての路をテッシュ、ランダ、ニコ らに村はづれで名残をおしみつつせん は、翌日の昼さがり見送りの山案内た ツェルマットの愉しさを満喫した二人 深い谿にまだ夕陽がさしていた。冬の プールをツェルマットに降ってもあの 小屋の掃除をすませ前日たどったシュ なかった。それでも四人の脚並はそろ の雪も多少ベトついたりブレーカブル を期待したが、あまりの晴天に氷河上 って五時間の登りを一時間余で降って クラストだったり快適な滑降とはいか たしたわれわれは、氷河スキーに粉雪 宿願の冬のモンテローザの登頂をは

おいてくれた宿はこじんまりとしたパ かどらずフェの村に入ったのは夜半ら う夕方の六時に間がない。幸いに月夜 でザース・フェの山案内で僕とはスキ タケさん、ザースの谿に入ってみよう ンションだった。翌日は日曜で信心深 ょっと前だった。イムゼングが頼んで で足もとは明るいがいっこうに道はは よ」と誘いをかけてきた。僕も否定は ー仲間のイムゼングを呼び出した。も しない。スタルデンの郵便局から電話 雪山に魅せられた松方は「どうだい

登山をやり、いったんフェの村に帰っ ールホルンとアラリンホルンのスキー 小屋を基点にしてわれわれはシュトラ 員たちでつくっているブルタニア・ヒ せて会堂から出てくるのを待って、ス く。正午近くイムゼングがミサをすま いこの辺の住民はだれもが教会に ユッテまで半日がかりで登った。この イス山岳会所属ではあるが、英国人会 行

るスキー行をも企て、モンテモロー峠 のすすめもあって、モンテモロー峠を 時はさすが初期のエヴェレスト遠征に に立ってモンテローザ東壁をながめた 越して、イタリアのマクンニヤガに降 まだ山に未練を持ちイムゼング案内

> の推賞おくところしらぬ大展望をほし 勇名をはせた山男ジョージ・フィンチ いままに出来た。

とぞあしからず。 僕があえて筆をとったのである。なに 報あたりで披露されるだろうが、それ 跡を記述し彼を大いにたたえた手記が ヴァンドから当時の松方の山歩きの足 デルワルトの山案内サミュエル・ブラ 起している。たまたまさきごろグリン くれた松方のおかげだと今しみじみ想 ておらず、だれも知らないらしいから 松方のヴァリスのスキー行は述べられ にはここに私が拙い記述ではあるが、 届いて、いずれその邦訳がJACの会 これもすべての冬山行に私を誘って

グリンデル ヴァ ル ド

田 口

グリンデルヴァルド人をかこむ小宴

邪のために欠席された。 出席の予定であった佐藤久一朗氏は風 それに田口二郎夫妻が宴に加わった。 十歳前後、小宴の主賓は国際文化会館 の息子ペーター・メルクレである。ル の駅前の由緒のあるホテル・バーホフ ドのフィルスト・ロープウェイを経営 よおされた。客人はグリンデルヴァル で二人のスイス人をむかえる小宴がも 康夫氏、同じ三女の浅岡八枝子さん、 方三郎氏の長女友子さんと夫君の山本 浦松佐美太郎、麻生武治の諸氏、故松 の松本重治ご夫妻。槇有恒、藤島敏男、 するローランド・ルーディンと同じ村 ーディンは六十歳近く、ペーターは三 三月二十二日の夕、新橋の北京飯店

ル・ブラヴァンドから同氏に、大変旧 のは、グリンデルヴァルドのサミュエ い日本の山仲間、とくに松方三郎氏が 松本重治氏がこの宴をもよおされた

ていられるので、今夜の催しは松方さ うことになったのかと思って出かけた ディンは旧知の間柄であるのでそうい があったのは私達とローランド・ルー があったに違いない、そして私達夫妻 ペーターが訪れるから宜しくとの依頼 親しんだホテル・バーンホフの息子の んとかかわりのあることがすぐ感じら ところ、松方さんのご令嬢の二方も来 にも出てこいと麻生武治さんから電話

悼文である。 て一べつするとサミュエル・ブラヴァ すぐさま私に近づいてこられ、タイプ ンドが書いた松方三郎氏にたいする追 した三枚の紙をわたされた。手にとっ 部屋に入ると大柄な松本重治さんが

いている。さきに書いたように、 ター・メルクレに托したのは因縁め

からの (一九七四年早春) 郎 郷の谷で隠栖しているのだか、松方さ と、想像される。 旧の情ほだし難いものがあったもの んの追悼をつづるに際しては、随分懐 ァンドも、今は七十歳半ばを越して故 大臣、名誉博士まで身を高めたブラヴ の家系から身をおこし、国会議員、州

では、年輩のルーディンがまず謝辞を 迎の言葉のなかに、ルーディンさんの のべ、これにたいして松本重治氏が歓

ブラヴァンドがその一文をとくにペ

常に親しかったし、その追悼文による ではあったが、それにしても山案内人 さんはホテル・バーホフの家族とは非 から一流になれば大変尊敬される国柄 人、といってもスイスは山登りの国だ 持ちをもったと思われる。一介の山案 者としてこれ以上の者はないという気 代の山仲間に追悼文をとどけさせる使 ンド)にしてみれば、槇さんやその時 のお母さんであって、ザミ(ブラヴァ マルタがこのたびやってきたペーター っているが、その若い婦人のひとりの 女をつれてフィニスタールホルンに登 さんと一緒にホテルの主のふたりの息 と、昔、正確には、一九二六年の夏、槇 悼文を不完全ながら走り翻訳して申し れた。ご指名があったので私がその追 典型として松方さんをあげられ、今日 意味のことを言われ、そうした最良の デルヴァルドを訪れるように、と言う ように、あの美しい谷とそこに住む人 だが、望むらくは、今日の会の仲間の ァルドに歓迎されることは有難いこと 言われるように日本人がグリンデルヴ の言葉を聞いて頂く、と言うお話をさ 出席されており、ブラヴァンドの追悼 の集りに故人に代ってふたりの令嬢が 々を本当に愛する日本人だけがグリン

し、また三席離れたところに腰かけてんが歌詩を覚えていられることに一驚 を作り山岳会に届けたいと思う。 ので照会中であるが、早急翻訳下書き ヵ所地名その他で不詳のところがある 景が、とてもノスタルジックであった。 いられた槇さんが大いに和唱された情 ぎやかになったが、私の隣席の浦松さ ヴァルダー・リードが斉唱され会はに 麻生武治さんのリードでグリンデル ブラバンドの追悼文のなかに一、二 (四九・三・二四)

松方さんのこと

小

うと存じます。 思いますので、その他の会報や機関誌 よせられていたことはご承知のことと に発表されたものを数点ひろって見よ 山の雑誌には、いろいろの方が追悼を 松方三郎さんがなくなられてから、

員が主宰されております日本山書の会 のレポートであります。 行、通巻一二九号。これは小野敏之会 方三郎追悼号」とあり、 「山書月報」昭和四十八年十月 内容はトップ 表紙には「松

四谷龍胤さんなど八人の方が記されて 景』その他「鳥水翁追憶」を再録され、 に、かつて松方さんがこの会の「山書 つぎに小野敏之さん、坂戸勝己さん、 研究」第三号によせられた「『扇頭小

忠雄とで協力して作った『日本山岳文その中で坂戸勝己さんは「僕と清水 に頒布したのが縁で、昭和九年の秋頃、 献ノート』を昭和七年の三月と十一月 共立社の南条勘五郎から、 山岳講座刊

洋の山岳文献の解説講座の執筆の依頼行の話が清水書店に舞い込み、僕に和 れた『外国文献』誕生のいきさつであ があったが、山の洋書については全く 社版山岳講座第八巻に松方さんが書か た。こなど申されています。これは共立 ることを南条氏に進言したことがあっ 自信がないので、松方さんにお願いす

本ユニセフ協会々長古垣鉄郎さん、前 辺昭さんの方々です。その中で、 てボーイスカウト総コミツショナー渡 国立近代美術館長今泉篤男さん、そし 日本山岳会々長三田幸夫さん、元京都 リーの友」委員長神守源一郎さん、日 君をしのんで」で、出席者は「ロータ 一月号。内容は「座談会・故松方三郎 った人は、いないんじゃないかな。 あんなに多方面の肩書きを持

古垣 勲一等を郵政省から貰ってい あれは不思議ですね。 亡くなったとき、四〇以上も

それから、記事はすこし飛んで、 三田 四~五年前、ヒラリーが日本 いろんな肩書があったそうです。 官邸でご馳走になったことがあっ 来たのを見るとボーイスカウトの ばりなかなか現われない。やって て、松方もよばれたのだが、やっ に来たときニュージランド大使の

寄せて、松方さんがなくなったことは、 セント・アンソニー・カレーデのリチ れていったのである。オックス・フォ ャード・ストリー教授は、私に手紙を ード大学にある、東洋問題を専攻する 友関係が、彼らしく、全世界に展開さ

いいりから 足かけこ年 うちにゆるいます いまってすべらなる 明凌遍9手初日 の以外も一伯予定 じきぬかなます たがさですか、もう おはがき面難り 八院一などいりうと 世界の文化界の

神守あれはまた似合うのよ(笑)。 渡辺 みんなにも、なるべく着るよ うに言っていました。 制服なんです。階級章がいろいろ んな無邪気さがありましたね。 ついているけど誰も知らない。

言われております。 とか叫ぶとか、文句を言うとか絶体に かにもよるけれど、山の影響かね」と しなかった男だね。毛並みとか人柄と そして、終りに神守さんが「ぼやく に、でも趣味はよかったな。 にスポーティな上衣というふう も違ってる。フランネルのズボン 見なかった。上衣とズボンがいつ ちゃんとした揃いの背広姿なんて

「ロータリーの友」昭和四十八年十

そして最後に「とまれ、さわやかな交 うまいものを食べることであった。」 誌です。「松方三郎追悼」として、松 も煙草もたしなまず、道楽といえば、 一さんが書かれています。 本重治さん、長谷川才次さん、富永惣 文化人の集りであります生成会の機関 その中で松本さんは「三郎君は、酒 「心」昭和四十八年十二月。これは

一大損失だと私に書い れています。 と私は思う。」と結ば て来た。その通りだ

成田布 城田二二三

津の寮生活の思い出 代の後輩として、沼 歩しながら、大声で を松方さんはよく散 を「海辺の松林の間 母校学習院中等科時 寮歌をよく歌ってい また、富永さんは

見受けた。」と記されています。 ぞ弥生の雲紫に……』と思い存分高ら の山は綺麗だね。雪がすばらしい』そ さんはその山に吸い込まれるように見 晴れやかに一面飾られていたが、松方 段の上にアルプスの白銀の姿の写真が た。なかでも北大の寮歌が好きで『都 はそこに、若々しく夢みる松方さんを れだけ言って、また山を見ている。私 上げていた。私が声をかけると、『あ 下でぱったり出遇った。丁度その時、階 然松坂屋デパートの二階へ昇る階段の 若者は耳を傾けた。」また、「ある時偶 たし、これがまた松林にひびく時、みな かに歌う時の松方さんは幸福そうだっ

幹人さんが書いておられます。 昭和四十八年十一月号には松方三郎会 長追悼として、村岡景夫さんと三ッ木 なお、民芸協会の機関誌「民芸手帖」

も作られてからのものでありますが、 ります。もう瀬田へ移られ、例の住所、 で、昭和四十七年か八年かわかりませ 局のスタンプがはっきり読 めないの 氏名、電話を三行かこいにしたゴム印 は五島美術館蔵の地獄草紙の断簡であ 絵はがきが一葉出てきました。その絵 を整理していましたら松方さんからの 先日、こと二、三年間の郵便物の束

げなければならない。

かつて、戦後の不自由な、人心の平

て妃殿下のご好意にまずお礼を申し上 山岳会員として、われわれはあらため 有志に配布し、上高知の山岳研究所建 である。松方三郎さんが、生前、妃殿 がその編集にあたり、昭和三十九年八

下のご好意によって「山岳会の会員の 月に龍星閣より出版、発行されたもの よりなる貴重なもので、松方三郎さん 七年までの間に筆をとられた三十数篇

を得たのであったが、今、ここに日本 設資金に充てる……」こと、のご承諾

す。胃潰瘍の手術の跡しまつですから endも一泊予定でうちに帰っていま が、もうじき卒業します。この Week 二年入院し、などというと大げさです 時間がかかるんですね。」 「おはがき有難う。昨年から足かけ

だったのではないでしょうか。とにか 日この頃です。 く、松方流の筆跡がなつかしまれる今 とあります。多分第一回の手術の後 (四九・三・10)

X

X

報」の中に「最も要領よく、短文にし については、ページ数の限られた「会

しかもこのご著書の粋を最大限に

実はこの貴重なる文献の詳細を語る

まとめ上げる」には正直のところ、

秩父宮仁雍親王 文

成瀬岩雄

「思い出の 記」

すいものとして置きたいなら国民の声 天皇もまた心ならずもそれに巻き込ま にご意見を述べられているのには感激れ俗人の思いもよらぬことまで、明快 ツはもちろんのこと、社会的時論から 細かいご観察と思慮によって、スポー で、国民の力で、もっと形式ばらずに、 み、天皇を人間として身近な親しみや か。国民がこの轍を踏まないことを望 れた結果だといえるのでは ある まい 人の意図に多数の国民がひきずられ、 意志ではなかったが、少くとも一部の の他はないのである。 人生論に至るまで、とうてい、われわ 「天皇を神様あつかいしたのは国民の とくに、「自由に国民のなかへ」で

からしむるのであるが、今となっては 者に「その人を得たり……」の感を深 い出の記」を繙いているとまことに編

しまったのはいかにも残念なことであ 亡き松方三郎さんをも偲ぶ書となって

> 私をして感銘措く能わざるものばかり うのはそれほどにこのご著書の各篇は 迷わざるを得なかったのである。と言 ずれを採り、いずれを措くかについて

座に「夢違い観音」の微笑、「永遠の 夫妻の写真は暫時、次ページを繰るの る数葉のお写真を拝見すればなおさら ることは私に限らず誰でもその印象を しいことを述べる前に言って置きたい 言えば、人生読本でもあると思うので 微笑」を思い出さざるを得な かった に踌躇せざるを得ない……。私は、即 のことだ。とくに、和服を召されたご 深くするに違いないと思う。巻頭を飾 優しい、温かさが一貫して溢れでてい ことは全編を通じて殿下のいかにもお 貰いたい随筆集とも言えるものだ。 ある。学校の教科書にでも引用させて も多くの感銘を与える、平易な言葉で はない……山に興味のない人にとって てはおられるが、ただの「山の本」で ことだから山についてのお考えは述べ であったのである。もちろん、殿下の この内容について二、三、書評がま

本書は殿下が昭和二十二年から二十

その内容については、まことにきめ

と仰しやっていたことは、あまり知る あられた殿下は「…でも……槇さんと 静を欠いていた時代に、不幸、ご病床に

人も少ないだろう。

こんなことを念頭にこの殿下の「思

松方君がいるから楽しいですよ……」

天皇が自由に行動できるようにすると

られていた……」一人として認識不足 れるように「一部の人の意図にひきず 持ちとして、素直に言って殿下の言わ がね、とかく、高貴の方々に対する気 を恥じざるを得ないのである。 らない)と末尾の言葉で結ばれている は、せめてもの慰めといわなければな 平和国家としての姿をみられ たこと 念願されていた母上が、新しい日本の は必然である……」や、「常に平和を 皇が再び国民と離れた存在になること とだ。国民がこの努力を欠くならば天 「亡き母を偲ぶ」の一章は私等もかね 英国山岳会の名誉会員にまでなってい り、その昔、殿下がスイスでスキー登 誌にも英訳されて掲せられたものであ

のであり、かつて、英国山岳会の機関 っては何と言っても興味深い勝れたも

殿下が永らく病床にあらわれた時の

いては感銘の言葉を述べている(注、 るアーノルド・ランもこの紀行文につ 山を楽しまれた時にお供し、現在は、

はればれとしたものになるに 違いな ゆくならば、苦しい日常生活もよほど が明るく、フェアープレイで解決して を述べたらキリがない。あらを数えた ツイ、読者をして眼頭のあつくなるの のお優しさを如実に物語るものとして ない様に咳をする」等に至っては殿下 ずらわすのも、と、ふとんを頭からす と思うと、こんなことで一々人手をわ 気がつけばとんで来る(看護の方々) 痰がひっかかったのか、咳が出だした。 言葉ではないか……。 しく今の世にもスッポリあてはまるお い。『プレイ・ザ・ゲーム』などは正 できるだけとれをスポーツ的にお互い ら数限りなくあるが、このような場合、 の中で「われわれの現在の生活は不平 を覚えさすものではないだろうか…。 っぽりかぶって、できるだけ音のもれ こと、「どん底のころ」の一節、「突然、 また「プレイ・ザ・ゲイム」の一篇 久に生きるがための長き眠りにいまぞ は死せるに非ず、汝の高潔なる心は永 住むと人の云う」をどこかで引用して 辿る運命、神の仕業としてアッサリ、 が「思い出され」る立場になってしま 殿下の思い出」として執筆して貰った ンに本会より寄稿を依頼し、「秩父宮 号に掲せるため、とくにアーノルド・ラ 想像し、聖書の一節にあると聞く「汝 を語り合っている。なごやかな風景を 空の彼方の国で殿下と共に再会の喜び いたことを思い出し、幸、住むと云う ッシュの言葉「山の彼方の空遠く、幸 りも松方三郎さんが生前、カール・ブ もう、くよくよ言わずに諦め、それよ ったことは、これは何れは人間として をここで会員諸氏にお願いしておく) ので、次号「山岳」を期待されること この感銘の言葉は「山岳」、一九七四年 つきたるなり」をはなむけの言葉と什

的が達せられる。自分も今後はこの気歩一歩、確実な歩を運んではじめて目 て「登高」、「山の旅」は殿下を引付け た山の魅力についての紀行 文で あり スキーとに、先ず指を屈する」に続い んといっても、山のスポーツ、登山と 「山登りはトリックではできない。一 「いろいろのスポーツをしたが、な 更しました。そのため、すでにい

くれておりますのでお詫び申し上 ただいている原稿の掲載が一部お

者一)山が教えたものはこのことだっ 山を知らない人に(ご自分のことを謙 持を忘れないで世の中をわたりたい。 行文としてもまた、われわれ山党にと 遜して言っておられるのだと思う一註 た」と結んでおられるがこの一篇は紀 南極をつなぐもの E

マラヤ

لح

樋 П 敬

南極観測は、その開始から山と関係深 (朝日講座『探検と冒険』) によれば、 村山雅美氏の「日本の南極探検史」

選出が決った」。 である。そして西堀栄三郎氏の副隊長 なった。さしあたっては副隊長の選出 て懇談、その全面的協力を得ることに 手はじめに日本山岳会の首脳部を招い 協会の協力を求めていく方針を決め、 委員会では、今後はひろく関係学会、 教授が観測隊長にきまった。そして、 施が正式に決定し、十一月末、永田武 「隊長の人選までこぎつけた南極特別 一九五五年の秋、南極地域観測の実

るところに南極観測を具体化しようと たのであった(村山雅美『南極点への ヒマラマから南極への道を歩み出し 西堀栄三郎らの諸氏にすすめられて、 て、その日に副隊長を正式に受諾した 委員長茅誠司、観測隊長永田武、そし 合に招かれ、席上、南極特別委員会の 立ったその日に、「東大山の会」の会 の暮、マナスルから帰り、羽田におり して、村山氏自身、その年(一九五五) する第一の姿勢がみられて面白い。そ この「手はじめに日本山岳会」とあ

係をもってスタートしたが、十五年を いわれるようになった。 地や登山の経験は不要である。 化』して、最近では、観測生活に寒冷 経た今日、昭和基地もすっかり、都市 こんな形で、南極観測は山と深い関 とさえ

では、南極と山、とくにヒマラヤな

本号より体裁をかなり変

どの高山とは無縁になったのかといえ 性があるからである。 いて南極観測の手法が生かされる可能 というのは、たとえば、ヒマラヤにお ます関係を深めてゆくように思える。 むしろ逆に、今後、別の形でます

は、この手法を身につけて行った。そ 学的研究に生かされるのではあるまい の蓄積が、これからヒマラヤの地球科 参加した山岳指向の地球科 学者 たち へ派遣される過程において、これらに そして十三次にわたる観測隊が南極

がある。 る「氷河台帳」をつくろうという計画 えば国際水文学十年計画(I·H·D) 当する国際共同観測をあげれば、たと るが、ヒマラヤ研究においてこれに相 五八年にかけての国際地球観測年であ つに、地球上のすべての氷河を記載す にしようという計画であるが、その一 って、地球上にある水の実態を明らか がある。一九六五年から十年間にわた

年「一九七一」の八月、モスクワで開 かれた国際測地学地球物理学連合主催 日本に期待されるところが大きい。昨 地域に多くの登山隊を送りこんでいる とも資料が少なく、その調査は、この ムに出席した際、外国の多くの氷河研 「山岳地域の氷と雪」シンポジュー そのなかで、ヒマラヤの氷河はもっ

された点が、大きな影響であると考え 与えたか。その評価は人によってさま 地球科学的研究を展開する手法が確立 画の遂行など、いわば、大陸において プロジェクト・システムによる長期計 参加、基地設営による長期観測の実施、 機として、大規模な国際共同親測への ざまであろうが、私は、南極観測を契 の研究方法、研究体制にどんな影響を 南極観測は、日本における地球科学

最後に一言。「思い出の記」の編者

南極観測の開始は、一九五七年から

三月四日ダランバザールよりキャラ

究者から希望されたのは、その点であ

をたてる基礎資料となる。そして、こ において氷河学、水文学の研究者が育 のような調査研究をネパールの人たち とは、ネパールにとって、水資源計画 つことが期待される。 と共同で進めることによって、この国 一方、ヒマラヤの氷河を研究すると

間は長いものでなくてはなるまい。そ その研究の進め方は、地域は広く、 がりが存在し得るのである。 して、そこに南極観測と本質的なつな も、重要性を増してくると思われるが、 にとっても、地球全体を理解する上に ヒマラヤの地域科学的研究はネパール これと同様に、氷河以外についても、 期

いのである。 る若い研究者の課題であるといってよ 法と体制を展開してゆくか。これが、 いま、大陸における山岳研究を指向す れからヒマラヤでどんな地球科学的手 南極における蓄積の上にたって、

(名古屋大学水圏科学研究所教授)

外 通 信

海

成城大学ジャヌー遠征隊

ました。ひきつづき登山活動に入り、 を五、九〇〇m地点に四月六日建設し こと十五日間、フィックスロープ約一 ャンプを進め、ピッケルをふり続ける のルートによってヤマタリ支氷河にキ 独自の判断によってフランス隊とは別 氷河四、八○○m地点にBCを建設し ン、グンサを経て三月十九日ヤマタリ バンに入り、ダンクタ、シドワ、ドバ ・五㎞によって、キイポイントのCII

上ることが出来る見通しです。 く、シェルパの中にも数名の屈強者が おり、五月上旬には何とか頂上に這い き抜かれておりますが、隊の士気は高 イルは片時も手ばなせぬ長丁場にしご しただけあって、ピッケルとアイスバ 目下、技術的最困難部と目されるC テレイ、パラゴ等大登山家達が苦戦

ート工作を展開中です。 ハーケンとロープを投入して懸命のル まずはジャヌーからの近況を。 (四月九日付 宮下秀樹あて)

Ⅲ~CIV間の氷尾根に大量のアイス・

ティロット谷

マラヤ遠征 報告 一九七二) (東京電機大学二部山岳部ヒ

須口

久邦 雄利 編

等の参考となるように纏められてい 文献類も整理されており、今後の遠征 ル州登山探検年表としてまとめたり、 入るために相当の文献・資料等を調査 征記録と報告であるが、この地域へ し、それをカシミールおよびヒマチャ インド北西部のヒマチャル州での遠

や写真をもとにしてのテイロット谷源 ないことから、ティロット谷での測量 また、この地域の地図は完全なものが 入禁止区域であるということで下山 あと一息のところで、インド政府の立 合いの結果 6,109m 峰へ向うことにな ンの登山許可が発行されたため、話し 頭部地図やこの周辺の地図を作製し ト (5,800m) の登頂に成功している。 ブラン南峰 (6,140m) とシリパルバッ し、改めてファブランを目指し、ファ 同時期に滋賀岳連隊と同じファブラ ティロット谷から入って頂上まで

に、本報告書をまとめた努力が認めら る遠征報告に止まっていないところ 本報告書に添付されているなど、単な

ラヤ遠征隊発行、 一九七四年一月、 東京電機大学ヒマ 一七二ページ、地 (高遠 宏)

『マナスル西壁』

橋 照著

刊行された機会に、青山の青年会館で ったことに気付き、早速その方を読み き私は、前に高橋照さんが著わした 記念パーティが行なわれたが、そのと 『マナスル西壁』も、まだ読んでなか 先頃マナスル西壁隊の公式報告書が

の感を与える。 ルの情況を知悉していた著者ならでは 荷通関等の煩瑣な記述(第一、二章) がすぐれており、さすが当時のネパー が、ことにキャラバン開始までの、隊 ような、一寸映画的手法を感じさせる 書の書き出しも、トタンに五、五〇〇 なみならぬ腕の持ち主だけあって、本 mの前進基地の描写から始まるという 照さんはもともと映画製作にもなみ

とを細大もらさず記録し、そのフィー ソクの光で二時間以上も、その日のこ らいよく判る。とくに著者は毎夜ロー 者は、その何れにも公平な光をあてて、 ないものはない。したがって隊長たる とっても登頂のための不可欠の行動で たがって動いているので、どの一つを ず、各キャンプではそれぞれ計画にし ジのあとがき)というから、材料はあ 十冊くらいになった(本書四〇二ペー 記述したいと思う心境も判りすぎるく 常時行動している者が一、二に止まら りすぎるくらいあったことと思う。 ルド・ノートは大学ノートになおせば ヒマラヤのビッグ・クライムでは、

> 記述になってからは、却っていちよう ろうか。 登頂とかに力点をおいて、他はもう少 ライトに乏しい。問題の傘岩突破とか に詳しく述べられている感じて、ハイ そのためもあろうか、実際の登攀の し省略した方が、効果的ではなかった

あった。 ろうと、本書を読み終って感じたので いた隊員は、定めしやり甲斐があった 常に精確な情報をもち、正しく判断し なかろう。照さんがネパールについて ような隊長が、そうそうあるものでは 嗜好までもよく知って、とくに食物に たこととともに、こういう隊長の下に はとりわけ気を配ってくれた照さんの 認めぬ者はなかろう。隊員一人一人の さんが大きな役割を果たしているのを 大いにかかわること言うまでもないが マナスル西壁成功の要因の一つに、照 登山隊の成功は、隊長の指揮如何に

> 16-8-27.1

読まれた会員各位も、改めて本書を繙 拙いペンをとった。『山岳』67年には で新刊とは言い難いが、まだ本会報に 小原君の一文が載っているが、それを 採り上げられてないことを知り、敢て かれんことを希望する。 刊行後すでに一年以上を経ているの

十二月十日、文芸春秋社発行、定価 ージ、折込地図一葉、昭和四十七年 四六判四〇四ベージ、写真一六ペ (望月達夫)

昭和四十九年六月二十日発行 113 東京都文京区湯島一一六一一 利根川商事㈱さくらビル

東京都港区赤坂一丁目三番六号 日本山岳 振替口座東京四八二九番 (313) 二二八六(代表) Щ 崎 安 治 会

印刷所

株式会社

報

未刊作品をも含めてここに集大成ノ 茅ヶ岳で急逝して以来三年 いよいよ声価の高い。山の文学〟を そして山で死んだ作家 山を愛し、山に生き、

深田久彌

全12 老 〈監修〉●小林秀雄·井上靖·三田幸夫·今西錦司

★毎月十五日一巻ずつ刊行

①わが山山※

2 山頂山麓※

④瀟洒なる自然※ ③わが愛する山々※

6 5 一雲の上の道 日本百名山

17 ヒマラヤの高峰

8 ヒマラヤの高峰

9 ヒマラヤの高峰

回シルクロードの旅

一中央アジア探検史

11

12 九山山房夜話

※印既刊定価一、八〇〇円

朝日新聞

奚堂 一山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1·Tel(291)9442振替東京24723

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B 5 判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 〈菊判280頁〉定価980円

森林•草原•氷河

加藤泰安著 (A 5 判482頁) 定価1,500円 すこし昔の話

初見一雄著〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著 〈B 6 判334頁〉定価960円 山の古典と共に

大島堅造著〈四六判280頁〉定価1,500円 雪山・藪山

川崎精雄著

<A5変型判340頁>定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著 < B 5 判206頁 > 定価2,800円

山日記1974年版

日本山岳会編

<A6 判342頁>定価850円

67年 2,500円 66年 2,300円 65年 2,000円 64年 2,000円 62年 2,000円 62年 1,000円 Ш 岳 日本山岳会編 <A5判>

国立公園カレンダー

国立公園協会編

<A5判リング綴り>定価960円

屋久島・美しい豊かな自然 赤星 昌編 〈B 6 判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集 戸野 昭・朝倉 宏編

〈A 6 判126頁〉I 集240円・2 集280円

原野から見た山

坂本直行画文集

〈B 5 箱入布特製本〉定価4,200円

いろりばた

南会津山の会

〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シプトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳

〈A 5 判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

· 〈菊判362頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅 足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 〈A 5 判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

●買い易い

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101 TEL. 06(362)5736

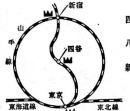
山の店 ●北へ来たら

山の店 ●フレッシュな

山の店

山とスキーの専門店

東京都文京区湯島3丁目38-9 片桐 盛之助 電話 東京(831) 1794·6680番



四 谷 店 東京都新宿区三栄町三番地 TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五 TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階 サービスショップ T E L (352) 6 5 6 4

日本信販加盟店

山友社をかはこ



がたる("シンテイ でんや 281~8456 中央区・八重ス401

秀山莊

登山とスキー具



東京都中央区日本橋通2-1 PHON; 271-7686 · 1718



◆◆昭和四十九年度通常会員総会◆◆

今井両監事 は再任

故松方三郎氏追悼会も

どが行われた。なお、同会場で引きつ が出席し、極めて盛会裡に閉会した。 とも月曜日にもかかわらず多数の会員 会もあわせて行われたが、総会、追悼会 づき午後六時より故松方三郎氏の追悼 告、自然保護委員会の連峰スカイライ 満場一致で承認されたほか、各支部報 の事業計画、予算案など四つの議案が 会)で開催された。席上、四十九年度 坂の〇・G・A会館(独逸東亜研究協 る四月二十二日(月)午後四時から赤 ン反対決議、上高地山岳研究所報告な 昭和四十九年度通常会員総会は、去 を選び議案に入った。

《通常会員総会》

まず、今西錦司会長の開会の辞と会

められた。 数に達し、総会成立の宣言によって始 者九一名、委任状一、〇四四通で法定 総会は、板倉常務理事の司会と出席

(総会であいさつする今西錦司会長)

決された。 除籍者についての第四号議案も可 ついで会費未納による一〇二名の を提案。全会一致で選任された。

十勝岳で現地支部長会議を開催 つぎのとおりである。 北海道伊藤支部長 (支部報告) 昨年六月

が捧げられた。 めとする二十名の物故会員に対し黙祷 務報告が行われ、上村伯太郎氏をはじ ついで、定款により議長に今西会長

がつくられるということである。 その記念事業を行うための準備委員会 年が本会創立七十周年を迎えるので、 集会のほか、とくに年末に行われた 山岳研究所の完成などが行われたこと された。それによれば昨年度は、各種 掲資料)報告され、全員異議なく承認 ぞれ同常務並びに同理事によって(別 告は板倉常務理事、収支決算および財 が報告されるとともに、本年度は、明 本年度の事業計画および予算案もそれ 産目録は伊倉理事。また第二号議案、 "近代登山の先駆者たち展"、上高地 第一号議案。昭和四十八年度事業報

両監事の任期満了にともなう次期監事 第三号議案は、今井雄二、村尾金三 きつづき村尾、今井両監事の再任 の選任であるが、今西議長より引

について行われたが、その概要は 述のように各支部報告、連峰スカ 報告事項に入った。報告事項は前 イライン反対ならびに山研の現況 総会は、続いて四時五十分より 施した。

五月。親睦山行年二回。県岳連と連け

を実施。ほか植物など研究会を時おり が、本年は高頭さんの二十五周年に当 て欲しい。何にも『しない支部』である 11一五名。各支部ともこの位は確保し 昨年十月末蔵王で「きのこを食う会」 越後藤島支部長・斎藤氏 会員数は

議を当地で開く予定。 は開催している。山研の開所とあわせ の協力にお礼を申し上げる。会員数一 本年は山梨支部の都合で現地支部長会 てウェストン祭に参加を望む。なお、 〇四名。合宿、例会、小集会など月一回 信濃蒲生副支部長 昨年の海外遠征

支部員五〇名。金山の木暮祭を十月二 って空白がつづきご迷惑をおかけした 十日実施する。 山梨大沢支部長前支部長物故によ

月「二土会」と名付けて第二土曜日に 阜山岳」という会報を発行しているほ で発足したばかり。事業としては「岐 日程度の山行と紅葉会を開く。 と市民へのサービスのため講演会を実 か昨年は越後支部と白山で合同懇親会 会合している。そのほか年二回一泊二 静岡山本支部長 会員数六〇名。毎 岐阜支部藤井氏 支部長は今西会長

ので役員会、集会、懇親会など切れ目 のない事業を行っている。本年度の新 部で「クラブ・ハウス」をもっている 富山中田支部長 会員数四九名。支 在一〇〇名前後。 小集会は月一回程度開き、 会員数は現

十三日八幡平ハイキング。五月には総 岩手笠原支部長 昨年十一月十一~ 秋田柴田支部長 会員三七名。 総会

いして事業を行っている。 宮城伊達支部長 会員数三四~五名

開催するので会員各位の参加を望む。 るので七月二十五日、碑前で高頭祭を

を感謝する。 告がなされた。

ったが近く発送する。 らに協力方を望む。 ○募金者の宿泊割引券はオープンがお

って欲しい。(会報三四七号参照)

規事業は、播隆上人の調査と顕彰、 部省の登山研修所との協力、自然保護 文

周年を迎えるので記念事業を検討中。 程度集会を開催。なお、明年創立四十 員数は多く三三三名。事業は年に十回 関西今西 (寿) 支部長 地域広く会

鬼の目山。 低調をばん回したい。大分と宮崎と交 代で年一回会合と山行を実施、昨年は 東九州支部木本氏 会員数二五名。

(連峰スカイライン反対運動)

めて高い。会員各位の情報の提供など どして反対の芽を押えているが、美し 展開する。山梨県は名称を変更するな カイライン一本にしぼって反対運動を 報告。自然保護委員会は本年、 報三四六号を参照のこと) のご協力をお願いしたい。 い秩父の自然が破壊される危険性は極 配布資料に基ずいて渡辺公平氏より (詳細は会 連峰ス

(上高地山岳研究所の現況)

委員長よりつぎのような点について報 山研の現況について林和夫山研運営

人の遺徳をしのんだ。

プンできる。 残っている。しかし六月十日にはオー ○建物は完成したが、まだ電気工事が 〇山研の建設に当り、会員各位の協力

○費用が物価高その他で当初計画より 四四〇万円程増大したので、募金にさ ○管理人は近く決定の予定である。

山小屋として規定を守り気持ちよく使○利用規定を制定したので、自分らの くれたので来年末まで有効とする。一 万円以上の応募者の記念品もおそくな

せよとの声が強いので、各支部にその 神崎集会委員=本部との親睦を密に

ための連絡委員を置いて欲しい。本年 は浜名湖で懇親の予定。

午後六時過ぎよりわが山岳会の至宝的 れ、多数の会員とともにこの偉大な岳 峰雄氏をはじめご遺族の方々もみえら されだ。会場には、松方家より長男の 存在だった故松方三郎氏の追悼会が催 総会終了後引きつづいて、同会場で 故松方三郎氏追悼会

があり、午後七時半過、追悼会の前段 を代表して松方峰雄氏よりお礼の言葉 りの追悼文が紹介され、最後に松方家 まず、今西会長のあいさつ、ついで、 過に盛会裡に解散となった。 をとりながらのなごやかな雰囲気の中 常務理事よりスイスのブラバンド氏よ の故人の思い出話があり、その後板倉 藤島(敏)名誉会員、加藤(泰)評議員 生前故人と親交のあった槇名誉会員、 に故人をしのんでの懇談となり、 は極めて厳粛に行われた。後半は食事 追悼会は宮下理事の司会によって、

槙有恒名誉会員 (要旨)

ーとして生涯を終えられた。三郎さん それぞれの方面における立派なリーダ 方であり、しかも八面六ぴの活躍で、 と私の交際は大正十年の学生時代から 三郎さんは社会的活動の極めて広い



で山を通じての長いつき合であった。

昭和 48 年度 収 支 決 算 表

収 入

自 昭和48年4月1日 昭和49年3月31日 至

科	目	予 算	決 算	増 減(△)
経常	収入会 金	12,050,000	13,412,468	1,362,468
入	会 金	1,050,000	987,000	△ 63,000
会	費】	11,100,000	10,202,972	160,000
過年月	宝 会 費」		1,057,400	
次年	度 会 費		665,096	500 000
於 身	会 費		500,000	500,000
事 業	収 入	5,500,000	6,368,300	868,300
広	告 料	1,000,000	956,000	△ 44,000
	記印税	500,000	272,000	△ 228,000
刊行	物売上	3,700,000	4,671,350	971,350
服飾	品売上	300,000	358,750	58,750
その他	事業収入		110,200	110,200
雑 収	λ	1,070,000	1,578,340	508,340
利	息	250,000	416,600	166,600
山岳診	療助成金	500,000	500,000	0
貸	室料	20,000	31,000	11,000
その他	雄収入	300,000	483,640	183,640
寄	付 金		147,100	147,100
未 収	金	3,598,200	1,418,200	△2,180,000
小	計	22,318,200	22,777,308	459,108
前年馬		7,209,246	7,209,246	0
合	計	29,527,446	29,986,554	459,108

出 支

財 産 目 録

基本財産 1. 昭和49年3月31日現在 種 類 預 入 金 先 額 貸 付 信 託 日本信託銀行本店 1,080,000 * 昭和48年度編入額 980,000円

たわれわれにとっては償うものがない 当時はロマンの時代であり、冬の富士 惜しい人を失った。 なもので残した功績は極めて大きい。 JACにかける三郎さんの情熱は大変 際にはこれが終生続いていた。そして をもっていた。とくに三郎さんとの交 思い出だ。初期の山男たちは夢と、感激 ボリーなどは今となってはなつかしい 山、ヒマラヤ、ボーイスカウトのジャン 人生を濶歩した人であろうが、残され 二郎さん自身は残すことのないような 私と松方君は学校が違ったりした関 滕島敏男名誉会員(要旨) そして秩父宮とのヨーロッパの登

ろ卒先して働き、その残した功績は極

岳会の松方であり、ほかのものでなか めて大きかった。松方君はあくまで山 ます。松方君が山岳会のためにいろい

ったからである。また、松方君の甘い

さがしなど共にしたのが今思いだされ Cのクラブルームやライブラリーの室 宅にきて話は深更におよんだり、JA

かなり後の昭和三年頃からだった。そ 違わなかったが知り合いとなったのは 係から山岳会の入会はわずか二年しか 残念だ。 そうであるので再会の望みがないのが いるだろうが私はどうも地獄に縁が深 くれている。彼は恐らく天国に行って よく、私のしんらつな皮肉にも打てば どろいた。話相手としてもまた極めて るが、おはぎを四つも食べたのにはお ものずきにはいろいろエピソードがあ 響くようであり彼の右にでるものはな かった。今私は好敵手を失って途方に

加藤泰安評議員(要旨)

わからないが非常に親しくなりよく自

ご冥福を祈るばかりである。 と惜しい人を失ったものだ。今はただ 根からのチャーミングさを備えたすば なのには感心した。あれだけの教養と のにはびっくりした。晩年の病院生活 くにサンドイッチを練り上げて食べた 話しのように先輩の甘いものずきには らしい人はもうなかなか出ないと思う も一緒でしたが、その励まし方の上手 私も同様いつも驚かされていたが、と 方さんの紹介で入った。藤島さんのお 私の人生でもよき先輩で、京大にも松 られない。松方さんは山ばかりでなく 山でのシゴキは相当なもので、冬の富 の大先輩だった。とくに手強い先輩で 士山での訓練での厳しさは今でも忘れ 松方さんは私が学習院時代の山岳部

(小倉 厚記)

> 山本憲二、松方三郎、若山美子、 則、牛越正、片桐一三、岡村精一、 太郎、白石勝教、高橋貞利、浜正 上村伯太郎、山下一夫、佐々木健

木暮友枝、加藤武三、池田光二、

(8

の後うまが合ったか合わないか一寸と

昭 和四十八年度会務報告

会員の移動状況 イ会員数 永年会昌 名誉会員 四九・三・三一現在 二〇名 一三名

※四八年度新入会員 通常会員 終身会員 復活会員 三、〇六七名 四八名 一三二名 一五名

※非会員応募件数 五件

応募金額

二七三、〇〇〇円

口物故会員(敬称略) 除物退 籍故会 二七四名 二〇名

分集会 四月一九日 習会および展覧会の開催 登山の指導と奨励に必要な集会、 ンゴル親善登山隊歓迎会(本会) 第二九四回小集会:モ

講

昭和四十八年度事業報告 目標対比 二七·三%

2 上高地山岳研究所状況 前述のとおり、ただし現在の募金状

況はつぎのとおりでありますが、

な

※会員 応募件数 五三六件 お一層のご協力をお願いします。

応募金額 四、四三三、八〇三円

目標対比 八八・七%

佐々木高美、宇田川久太郎。田口三郎助、尾崎喜八、金谷伊裕、

6) 図 書

種	類	摘	要	数册
和	書	(48年度受入册	130冊)	3,111冊
洋	書	("	32冊)	1,259册

什器備品

宛名カードケース(1),新刊書ケース(1),セフネス金庫(1),宛名 印刷機 (1), ローヤルタイプライター (1), 電話 (1), スライドプロ ジェクター (1), 雑誌棚 (1), 折りたたみ椅子(47), 机, テーブル (17), スチール黒板 (2), 両開書庫 (8), ファイリングキャビネット (6), マップロッカー (1), コンパック移動書庫(4), キーパー引達書 庫 (2),移動式跡台 (1),スチール書架 (4),組立用本棚 (1),スク リーン (1), 電気掃除機 (1), ホールスタンド (3), 手捉金庫 (1), 複写機 (1), タイプスタンド (2), 電気冷蔵庫 (1), 応接セット(1), 湯沸器 (1), 折りたたみ運搬車 (1), パンチカードケース (1), 耐火 金庫(1), テープレコーダー(1), 卓上電算機(1)48.5.10購入, ワゴン (1) 48.8.23 購入, 工具一式 (1) 49.2.18 購入

画 8) 絵

·北穂高岳滝谷(足立源一郎,油一25)·北穂高岳主峯(足立源一郎, 油-25)・或朝の槍ケ岳(足立源-郎,油-25)・槍ケ岳(足立源-郎,油—P8) ·群猿(石井鶴三,墨絵)。·鳥(石井鶴三,墨絵)。· 徳本峠から穂高連峰(石田吟松、墨絵)・富士山麓(茶木猪之吉、油 -A25)_·伊豆半島(茨木猪之吉,油-10)・針之木峠(茨木猪之吉 油-10) ・初冬の両神山 (茨木猪之吉,油-10) ・モンブラン・メー ルドグラス (シュラギントワイト,エッチング)*・北岳(高遠 版画)・白馬岳(中村清太郎,油A-50)・田代池の白樺(中村清太 郎,油一変型6)・後立山連峯(中村清太郎,水彩)・槍ケ岳初夏 (中村清太郎,油-10) ・ユングフラウ (山里寿男,油-10) ・涸沢 沢より北穂高(山里寿男,水彩一6)・カンチエンジェンガ(矢崎千 代子、パステル画)・ブカヒルカノルテ(渡辺九郎、水彩)

2. 運用財産

1) 保 証 金

種		類	預	入	先	金	額
保	証	金	㈱利 根	川商	事	7,3	14,000

昭和48年度編入額 1,314,000円

現金および預貯金

和	Í	类	頁	預	入	先	金	額
現普	通	預	金金	三和銀行協和銀行車方銀行	了本郷支加 一本郷支加 一本郷支加 一本作		1,0	50,101 84,204 28,208 18,194
定	期	預	金	八十二針協和銀行	了神田支瓜	支店 店 支店	2,0	58,272 00,000 00,000
金振	銭替	信預	託金	日本信記東京振	金融行本原	店		39,553 00,826
4	<u>}</u>	i	+				4,5	79,338

建 物(上高地山岳研究所)

場	所	長野県南安曇郡上高地国有林 114
構	造	鉄筋コンクリート(一部木造)造り 1 棟 109.35㎡

4) 未収金, 仮払金

摘	要	金	額
前歲 年 年 入 刊 払 未 算 物 最 元 行 払 元 刊 払	, b, x	\(\triangle \) 18	98,200 18,200 30,000 00,000
差 引 合 計		2,20	00,000

5) 刊行物、服飾品棚卸現在高

	摘	要	金	額
刊和	テ 物 (山岳, 飾 品 (ネク:	山岳覆刻版等) タイ等)	1,7	68,950 19,160
合	Ī	†	2,3	88,110

六月一五~一七日

現地支部長会議

(十勝岳)

十二月二〇日 第三〇三回小集会: 十二月一日 全国支部長会議 十一月一五日 第三〇二回小集会: 雪崩シンポジューム (岸体育館) (ホテルニュージャパン) 年次晚餐会

十一月三~四日 十月二〇~二一日 第三〇〇回小集 九月二七日 アフリカの話と八ミリ -月11五日 第三〇一回小集会:映 画と講演会 講師 デンマーク山岳会ハーリヴ の会 講師 津田周二氏(本会) 講師 市川邦治氏・丹部節雄氏 エドー氏 (箱根湖尻キャンプ場) 第一六回もみじ会 (大日山金剛院)

3 山岳遭難の予防とその対策に関する 2 登山施設の改善促進、その他登山の (三)展覧会 十二月一日 昭和四七年度以来増改築工事を進め 十二月二四~二九日「近代登山の先 各大学医学部山岳部による夏山診療 ほぼ完成した。 ていた上高地山岳研究所が十月八日 ための適切な事業 企画および指導 郎生誕一〇〇年記念展 駆者たち」 郎著作展(ホテルニュージャパン) 小島烏水、木暮理太郎、 「との一本展」松方三 岡野金次

印研究会 公講習会 -二月一〇~一一日 ·五月一七~二〇日 ・十二月一五~一六日 四九年二月八日 第三回高所登山研 九月二二日~二三日 研究会 究会:登山用語について(本会) 術講習会 山研究会 (平安学園花背学舎) 第四回高所登山 第一三回登山技 第一回高所登 第二回高所登 (御在所岳) (富士山)

七月二〇日 第二九八回小集会:信

「アルプスは招く」「シャモニー

(日仏会館)

濃支部アンナプルナ遠征報告会

七月九日 第二九七回小集会:映画

講師 小西政継氏

(本会)

六月二〇日 第二九六回小集会:岩

講師 日高信六郎氏、

大木操氏、

中塚癸己夫氏

登りの机上講習会

二月二七日 山岳図書を語る夕 二月二〇日 第三〇四回小集会:立 四九年一月一三~一五日 三月一三日 第二回山岳史懇談会: 講師 島田巽氏 月一七日 教大学カンパチェン遠征報告 氏を囲んで 回小集会:スキー懇親会 「一高旅行部の足跡」 婦人懇談会:今西錦司 (八方尾根黒菱平) 第三〇四 (本会) (本会)

五月二六日 新ルーム開設記念パー 五月二〇日 第二九五回小集会:大

岳山集中登山 第一一回木暮祭

六月二~三日 第二七回ウェストン

五月一九~二〇日

四月二〇日

全国支部長会議

(ニュートウキョー)

唐松、三俣山莊、白馬岳、合戦小屋、

七し八月(槍ケ岳、五色沼、

七月二一日

第二九九回小集会:中 松永敏郎氏(本会)

央大学アピ遠征報告会とエベレス

ト会議報告会

(本会)

昭和 49 年度 収 支 子 算 表 (一般会計) 昭和49年4月1日 昭和50年3月31日 出 支 自 科 目 予 算 前年度 増減(△) 収 入 ,807,100 ,267,000 100,000 450,000 12,501,000 3,000,000 100,000 2,693,900 733,000 科 目 予 算 年 度 减(△) 手文印交通家保営諸光電会交備振支福雑 · 曹費費費賃料費費費料費費費料費費費 具刷通信 860,000 410,000 収 入 13,000,000 12,050,000 950,000 経 760,000 ,220,000 650,000 ,600,000 110,000 入 会 金 1,000,000 1,050,000 50,000 620,000 3,410,000 50,000 150,000 60,000 150,000 686,000 15,000 ,096,000 900,000 会 12,000,000 11,100,000 費 険繕 65,000 150,000 70,000 180,000 費 過 会 年 度 10,000 30,000 税 会 次 会 費 熱話議際品替運厚 終 費 170,000 170,000 0 50,000 150,000 50,000 5,500,000 700,000 入 150,000 30,000 70,000 40,000 告 料 1,000,000 500,000 広 1,500,000 100,000 200,000 30,000 150,000 100,000 0 記 税 100,000 Ш 日 印 400,000 500,000 320,000 30,000 150,000 部利 営生 120,000 物 売 上 4,000,000 3,700,000 300,000 刊 行 服 飾 品 300,000 0 売 上 ,165,000 9,024,000 141,000 版書研導路、伊 その他事業収入 300,000 830,000 200,000 7,333,000 250,000 503,000 50,000 180,000 費費費費費行費費 6, 出図調指海名山そ 60,000 1,130,000 1,070,000 究 700,000 520,000 50,000 34,000 270,000 300,000 300,000 150,000 250,000 利 息 300,000 関発営業 385,000 100,000 351,000 370,000 500,000 0 山岳診療助成金 500,000 300,000 料 10,000 貸 室 30,000 20,000 200,000 350,000 7 収入 0 他雜 300,000 300,000 0 章、払財 30,000 30,000 収 △1,398,200 費金入費 未 金 2,200,000 3,598,200 会未基予 946,580 ,050,000 収 2,000,000 3,598,200 △1,598,200 未 金 產 000,000 50,000 <u>^1,000,000</u> ,000,000 2,000,000 仮 金 200,000 200,000 払 211,800 小 計 22,530,000 22,318,200 23,696,000 1,366,338 22,859,580 6,667,866 小 計次年度繰越 836,420 45,301,528 前 度 繰 2,532,338 7,209,246 $\triangle 4,676,908$ 年 越 △4,465,108 29,527,446 4,465,108 合 計 25,062,338 合 25,062,338 29,527,446 8その他 5 海外登山の指導 1登山の指導奨励に必要な集会、 力を得た。 7目的を同じくする外国の団体との情 6機関誌などの刊行 4 自然保護活動 ・ルーム移転にあたり、集会、青年懇 昭和四十九年度事業計画(案) ・海外登山における無事故登山を目的 山梨県の「連峯スカイライン」計画 会、 談会、婦人、図書、学生委員会の協 何エベレスト会議に前会長三田幸夫 (三十ヵ国、 (7) 「山日記」一九七四年度版:十二 **| 回会報「山」三三四~三四五号発行** (小山岳六七年:十月発行 に適切な指導を行なう。 園地内における山岳地の自然保護へ に対する反対運動の推進と、国立公 尾瀬、立山) 臼山岳覆刻版第二年二号、三号、 い国際アルビニスト 集会に会員 岡野 EUIAA (国際山岳協会連合) 小集会(報告会、講習会、シンポ 山岳図書を語るタ 婦人懇談会集会 ジューム) 席(十月二二~二九日:トビリシ) 会に会員田村俊介、鈴木郭之が出 寿、鈴木勝が本会の推薦で参加し 丹部節雄理事が出席した。(五 代登山の先駆者たち刊行 年一号、四四年一号:霧の旅:近 一四~二一日 ダージリン) 講習会の開催 (四月二五日~五月十日) 六十団体と情報交換 本会 年間十二回 研究 本会 本会 2 登山施設の改善促進その他登山のた 5 海外登山の企画および指導 4 自然保護活動の推進 3 印研究会 日展覧会 い講習会 ・「山岳」六九年の発行 機関誌などの刊行 的に会員へ適切な指導を行なう ・海外登山における無事故登山を目 ・国立、国定公園内における自然保 企画および指導 山岳遭難の予防とその対策に関する ・上高地に「山岳研究所」を開放 めの適切な事業 ・この一本展 ·登山技術講習会 ・雪崩シンポジューム ·高所登山研究会 ・来日外国登山家との交歓 ·年次晚餐会 護活動に協力 第一二回木暮祭 山岳史懇談会 各大学医学部山岳部による夏山診 夏山診療所開放 蔵書目録発行 会報「山」一二回発行 療所に対する援助 上高地 第二八回ウェストン祭 「山日記」昭和五〇年版発行 「この一本展」目録発行 「山岳」覆刻版発行 (槍ケ岳、五色沼、 白馬岳、合戦小屋、 和、 五月一七~一九日 五月一八、 洋書 唐松、三俣山 五~三月隔月 一一月中旬 六月一、二日 第三年二号 五一〇月 第四年一号 第三年三号 一二月七日 尾瀬、 一二月七日 七~八月 一九日 金山平 谷川岳

寸.

一月

月

本会

随時

五七六二 六九〇六 六九七七 六七一八 六七〇三 五九四五 五八九二 五八三 五五五五五 五五二七 五四九六 五三二四 五一二二 四六二五 四五〇二 四三二 三七九八 二〇九七 8その他 7目的を同じくする国内および国外団 六四四五 六四一七 五一九〇 四四八四 四二五〇 六三四四 四四〇六 会員番号 体との連絡をとり情報の交換を行な ・目的を達成するための必要な事業 昭和四十九年度 除籍者氏名 村山靖和 望月 晃 新島義昭 宮崎善人 篠田 土肥正毅 星野紀夫 北野一彦 北村二郎 須田義信 吉村睦人 ゐのはな山岳会 小桧山隆夫 鈴木伊和雄 東京ガス体育 井田博基 大野二郎 河西瑛一郎 長谷部昭久 岡村 崔 東京女子大学 大村光雄 大貫太市 東芝山岳会 文化会山岳部 (氏名) (昭48・3・31現在) 山岳暗 (支部 七一八五 六二七 四三二 七二六九 七一九一 六九二 五三二 七三二 五七一一 七三二: 七三二二 七二七二 七二三七 七三〇〇 六八五九 六二四一 七〇七一 四五六八 一六三七 七一八〇 五七五八 四七三七 四六七〇 六七三九 五四三五 七〇二五 五七二〇 六八八五 四八九二 五六五 四四八七 六八四二 五〇四〇 六二九九 六二九〇 七一五七 七〇九九 谷本光典 山田雅一 西嶋 恵 河野 橋本克彦 三沢一三 片桐正登 吉村俊一 山本剛 窪川五郎 甲田利広 早川研一 小泉昭二 伊藤栄寿 宮本靖雅 藤本 昇 森正幸 三津野十公 石川富康 名城大学山岳部 岸田堯夫 水越 武 柏瀬清一郎 加藤富雄 丹沢一男 市村吉正 大塚 襄 横田利八郎 西田彰一 知床登山会 肥後孝敏 荒井章仁 高田穣之 小泉義和 藤田武士 渡辺大三 沢田好文

> 山梨 " " 五二二五 六九七六 六二九一 六七七四 五六三四 五四三〇 七三十三 六九四二 六八七五 六五六七 六五六二 六三二 六二三五 六一六一 五五九七 五四二三 二五三四 六五三七 六〇七〇 山岳会 西田憲一 中沢 謙 豊口真治 John G. Day 松商学園短期大学 阿部重男 松野洋人 清水 誠 高山由比古 古江 恕 加久保一明 石田雅宏 大呂公禧 Robert A, Kandel » 大橋喜治 杉村直樹 小棚喬史 大橋克也 〇一名

昭和四十九年度通常会員総会出席

関西 石川

郎、三枝礼子、拓殖大学山岳部(竹内 金二、小原勝郎、小原晴子、山崎金次 斎藤平七、吉沢一郎、城谷一誠、村尾 遠宏、中屋健弌、藤島敏男、工楽英司、 熊次郎、渡辺公平、中保、小倉厚、高 亀一郎、安彦六郎、鈴木敏雄、藤井洋、 伊達篤郎、小林雄次郎、槇有恒、平沢 樹、山崎安治、名須川浩、加藤泰安、 鈴木郭之、藤島玄、児島勘次、宮下秀 勉)日高信六郎、白井厚子、小林重一、 木本善重、浅原重継、浜野正男、松本 笠原潤二郎、山本朋三郎、蒲生明登、 高山忠四朗、柴田均二、大沢伊三郎、 伊藤秀五郎、中田清兵衛、今西寿雄 嘉道、早川種三、錦織保清、川森左智

行、武原嘉雄)青木昇、森川洋佑、 菅野弘章、杉並区役所山岳部(須浪敏 島田巽、大森薫雄、秋山宏明、瀬名貞 秀夫、鹿野勝彦、湯浅道男、大倉昌身、 西錦司、百瀬舜太郎、斎藤俊哉、松丸 子、辻荘一、板倉勝正、伊藤信夫、今 久一朗、外山義夫、織内信彦、小倉董 和夫、保泉利喜之助、三田幸夫、佐藤 田辺主計、岩永信雄、勝田房治、折井 平、藤田佳宏、交野武一、堀田弥一、 左智子、山本良三、近藤信行、藤井運 今井嘉道、早川種三、錦織保清、川森 利、茶谷東海、村井米子、神崎忠男、 川村博通、田口二郎、広羽清、岩瀬皓 見学玄、広島三朗、原田達也、加納巌、 文子、小倉茂暉、今岡義夫、網蔵志朗、 郎、石原憲治、木村勝久、寺村栄一、 関口周也、住吉仙也、岡茂雄、早川義 治、折井健一、桜井信雄、山里寿男、 祐、小野敏之、安川茂雄、和久井正明、 山野井武夫、藤島紀子、福井正吉、丹 原啓佑、大塚博美、牧野四子吉、牧野 細川沙多子、坂戸勝巳、谷口現吉、鴫 信雄、松本竜雄、鶴岡元之助、勝田房 船越好文、中島寛、沼倉寛二郎、平林 つら、武田満子、成瀬岩雄、林知彦、 部節雄、山口健児、中河与一、斎藤か

五六九一

二二四七

藤平正夫 仁尾 昭 六五〇九

七三〇八

後藤元生

六00元

宮崎岩稜合

東九州

名誉会員松方三郎氏追悼会出席者

克敏、中川寛、大野俊夫、松田雄一、

久守和子 岳史、松方岩雄、松方雪雄、久守哲夫、 (ご遺族) 松方峰雄、松方和子、松方

原勝郎、小原晴子、三枝礼子、日高信 保、小倉厚、中屋健弌、高遠宏、藤島 野勝彦、島田巽、大森薫雄、瀬名貞利、 泉利喜之助、三田幸夫、織内信彦、佐 吉沢一郎、村尾金二、山崎金次郎、小 本朋三郎、藤島玄、児島勘次、宮下秀 高山忠四郎、蒲生明登、鈴木郭之、山 柴田均二、大沢伊三郎、笠原潤二郎、 茶谷東海、村井米子、神崎忠男、今井 百瀬舜太郎、斎藤俊哉、湯浅道男、鹿 滕久一朗、外山義夫、小倉董子、辻荘 臣、武原嘉雄、須浪敏行)林和夫、保 森川洋佑、杉並区役所山岳部(三渡忠 六郎、小林重一、菅野弘章、青木昇、 敏男、工楽英司、斎藤平七、城谷一誠、 松本熊次郎、渡辺公平、浜野正男、中 加藤泰安、木本善重、槇有恒、平沢亀 樹、山崎安治、名須川浩、伊達篤郎、 一郎、安彦六郎、鈴木敏雄、浅原重継、 一、板倉勝正、伊藤信夫、今西錦司、 中田清兵衛、今西寿雄、伊藤秀五郎

会 務 報

四月理事会

評議員、高遠委員 帰山各理事、村尾、今井各監事、山崎 近藤、春田、宮下、松丸、丹部、田村、 ○出席者 織内副会長、板倉、伊倉、 (四月十五日午後六時ルーム)

望月、金坂各評議員 神崎、原、大倉、山本、浜口各理事、 ▽委任 今西会長、中屋副会長、浜野

告、これを承認、四月十六日監査を受 昭和四十八年度の収支決算につき報 ・昭和四十八年度収支決算の件 (伊倉)

ける。

引上げることにしたい。 職員の給与二七九万円を三〇〇万円に な水路敷使用許可申請について(伊倉) 備費五○万円を一○○万円とし、また 物価の変動が計り知れないので、予 ・昭和四十九年度収支予算案修正の 上高地山岳研究所給水施設に必要

(11)

飲料水にあてる計画で、さきに文化庁、 年度から始めたらどうか、これについ である。なお山岳の出版についての懇 ので、国有林の使用許可申請を松本営 請していたが、このほど認可があった て早速準備委員会を組織して検討する 七十周年にあたるので、その準備を今 談会を五月開催したい。 林署に提出したい。 環境庁に対して工作物の新築許可を申 ルパイプにより導水して(三六〇m) ことで了承した。 明年度(昭和五十年)が本会の創立 山研の給水は、善六沢より、ビニー ▽報告事項その他 ・山岳六十八年版は六月刊行の予定 ・創立七十周年記念事業について (近藤) (織内) (了承)

図書室便り

新刊図書受入報告

(1)串田孫一著『心の歌う山』 実業の日本社寄贈 (1)『東京大学ネパールヒマラヤ遠征隊 スポーツ安全協会寄贈 報告書―チューレンヒマール1971』 昭和48

(1)久留米大学ネパール医学調査診療委 米大学ネパール医学調査診療報告書 員会著『ネパールの医療事情―久留 1968』昭和48

脇坂順一氏寄贈

(1)尾崎幸男氏寄贈

橋本誠二氏寄贈 (1)アメリカ林野局著 橋本誠二・清水 (1)尾崎幸男著『地図の手引き』 弘訳『雪朋―その遭難を防ぐために —』北海道大学図書刊行会 地図センター 昭和48 日本

(昭和49・4)

東京大学ネパールヒマラヤ遠征隊寄贈

(49-4) No. 1 (49-4)

(1)スポーツ安全協会編『安全登山必携』

(1) 『アルプ』No. 194 ('74-4)(2) 『岳人』No. 323 ('74-5) ③『山と溪谷』No. 428 ('74-5)

七戸町体育協会

洋書受入報告

(49-4)

「部報・会報」 定期刊行物受入報告

③兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 83 ②エーデルワイスクラブ 『Edelweiss ①新潟県山岳協会『越後』No. 7 (49-4) No. 44 (49-4)

4 『いこいの山岳会月報』No. 152 (49 (49-4)

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 588 ('74 5日本地図資料協会『古地図研究』 No. 49 (49-3)

(7)『長野県山岳総合センター所報』

(8)『日本ネパール協会会報』No. 9 ('73–11/12)

(9)東京野歩路会『山嶺』No. 514 (48-2) No. 528 (49-4) ('74-3)

伽中津山の会『登龍』No. 11 (八面山 田日本山岳協会『登山月報』No. 59 (49 地域特集)(49-3)

位横浜山岳会『山』No. 499~501('74 $-1 \sim 3$

(3)日本登山協会『山と雪』No. 191 (49)

新谷栄三郎氏寄贈 「その他」

(1)新谷栄三郎著『初心者に対する冬山 尾崎実子氏寄贈 術を体得するためのアプローチー』 の指導法一高所における自己管理技

Dr. Arnold Gubler 寄贈

①『歴程―尾崎喜八特集―』No. 187

1. Jakob Eschenmoser Zürich, Orell Füssli Verlag, Bergsteigen und Hüttenbauen" "Vom

[海外雑誌]

1. "Alpinismus" 74-1,2.

2. "Appalachian bulletin" Vol.

3. "Der Bergsteiger" 74-2.

5. "The Himalayan Club. Ne-4. "Climbing "Mar./Apr. '74. wsletter" No. 29. Nov. 73.

6. "Mountain" No. 31. Jan.-'74. "Österreichischer Alpenverein. Mitteilungen" 29 Jahrg. Heft. 1/2. Jan./Feb. '74.

8. "Österreichische Alpenzeitung" 91 Jahrg. Folge 1393. Jan.

9. "Panorama of Slovakia" '73-6

ルーム日誌 (49年4月)

2日(火)山日記編集委員会 1日(月)集会委員会

10 日 9 日 8日 5日(金)青年学生懇談会 (火) 財務委員会、 (月) 学生部委員会 (水) 図書委員会 自然保護委員会 稲門山岳会

(火) 会計監査 (月) 自然保護委員会、 (金) 学生部委員会 理事会

16 15 12 日 日 日

月 昭和四十九年度通常会員総 青年学生懇談会 会、支部長会議、故松方三

22 日 19 日

24日(水)山日記編集委員会 四月中来室者 三四七名 ·G会館

郎氏追悼会 以上於O·A

会費を未納の方は至急

納入して下さい!!